上高井教育会報

第195号
発行所　上高井教育会
発行人　上高井教育会理事長　山岸　徹
編集人　会報編集委員長　斎藤章子
印刷所　須坂新聞社

自己研修

大平（おおだいら）台地から神秘のメッセージ

西原隆雄

六月下旬、高山村村誌調査員五人で柞沢川と樋沢川に囲まれた舌状地形をした二つの峯をもつ大平台地（一、八七二m、一、八二四m）の地形地質調査に出かけた。

老ノ倉山腹（一、九〇〇m）付近から二mを越えるチシマザサ（ネマガリダケ）草原を尾根道を探しながら行く。

タケノコ狩りの道が、獣道のようにトンネルになっていて周囲は見えない。しかも、チシマザサは沢に向かって斜上、倒れているためにそれに沿って谷に向かってしまう。ジグザグ歩行となって、時間を費やしてしまった。やっと、遭難の多く出る難所を無事通過した。

尾根道に出ると、タケノコ狩りの人たちが入らないために、直径二cmもある立派なタケノコが目につく。水分補給をかねて、タケノコをかじり、熊のマーキングを確かめながら、歩を進める。

この辺りには人の手が加えられていないので、尾根筋、沢筋にこの地域の自然植生がまだ残されていた。

一、八七二m、一、八二〇m（写真）の二地点では、大平溶岩の露頭が見られた。上部は、大きな岩石がゴロゴロしていて、風衝地帯となっていた。樹木は背が低く、岩場のわずかな隙間に、コメツガ、クロベ、ゴヨウマツ、ハイマツSP、ダケカンバ、サラサドウダン、ベニサラサドウダン、タカネナナカマドSP、アズマシャクナゲ、ハクサンシャクナゲ、ムラサキヤシオ、ゴゼンタチバナ、マイズルソウ、イワカガミ、ミツバオウレン等の植物が見られた。露頭の下五〇mほどからチシマザサ草原が広がり、その下にミズナラ、ハンノキ、イタヤカエデ等の広葉樹の第二次自然林とスギ、カラマツの植林地が広がっている。

大平溶岩の露頭は、南壁、北壁も浸食を受け五〇～二〇〇mの断崖となって、ベルト状に西方向に伸びている。一、三〇〇m付近の北壁には、トウゴクミツバツツジSPの群落が見られる。

当初、南斜面を降りて下山する予定であったが、危険が多い為大きく迂回し、翌日、下山することとなった。

（仁礼小）

大平溶岩の露頭

本校の中核活動――

花・福祉・歌声に心を合わせて

仁礼小学校

毎朝、フラワーロードに鮮やかに咲くサルビアに水を施す六年生（マイじょろ活動）。SBC音楽コンクール地区大会の発表に向けて毎朝歌い込みに励む五年生。グリーンアルム（総合福祉施設）に立ち寄りボランティア活動（天使の訪問）を積極的に進める三、四年生。飼育、栽培、音楽活動にはまり込む一、二年生。

仁礼小学校では「花・福祉・歌声」を中核に、各学級の子ども達の求めや願いに応じた教育活動を進めている。

【花】昨年、フラワーブラボーコンクールに参加し、長野放送賞に輝く。今年は全校児童が参加して花壇を作り上げたいとの願いより、花壇のテーマとイメージデザインを全校から募り、「星空のハーモニー」というテーマのもとに、学年ごとに担当する花壇を持ち、苗の移植や追肥、罐水を続けてきた。そして、今年も同コンクールで優良賞を受賞した。委員会の積極的な花壇への関わり、そして高学年児童の花壇の手入れ、PTAのボランティア活動などが、この賞を頂く支えになっている。また、六年生は一人一鉢の三本仕立ての大菊作りや四年生による小菊作りなども進められている。

水をやり、語り合い、花の気持ちを感じ取り、受け止める中から、「いのち」あるものを愛する優しい心がかもし出されてきている。

【福祉】四月に全校でJRC登録式を行った子ども達は、各学級ごとに青年赤十字の精神をもって、自分達にできる奉仕活動や福祉活動を進めている。五月、グリーンアルムで開催されたバザーへの参加を呼びかけたところ高学年児童約七十名が足を運んだ。お年よりの皆さんに学級を紹介し、歌を聞いていただいて交流を深めた。そして、昨年度学校で育てた越冬させたカンナの球根数十株をフリーマーケットで販売し、その収益金をJRC委員会よりアルムの施設長さんに寄付した。その後も、JRC委員が中心となって鉢花を届けたり、花壇に球根を植えたりする活動が続いている。また、特別養護老人ホーム須坂荘さんへの訪問も行っている。

二学期になって始まった五分間ボランティア活動は、希望の児童が下校時にアルムに立ち寄って、お年寄りの方々と、挨拶や握手、お話等をする活動（天使の活動）である。中には、一人のおばあさんと親しくなり、国語の教科書を読んだり聞きたかった曲のテープをさがして一緒に聞いたり、リコーダーの演奏を発表したりと、関係が深まっていく子も見受けられる。

この活動を通して相手を思いやる気持ちを深め、そして相手の願いに応えることへの快さや喜びを感じ始めている。

【歌声】SBCコンクールには二年生も参加しているが、各学級において、朝や帰りの時間に学級音楽を位置付け、歌声が校舎内に響き渡っている。全校音楽で歌う楽曲や行事の歌などでも、だんだん歌声が大きく響き、表現力が高まってきている。

【まとめ】本校の児童の全体的な特徴として「表現する力が弱い、声がなかなか出ない」という課題がある。何とかその力を付けさせたいと願って、「自信を持って活動する生き生き楡っ子の育成～伝え合う力を高める指導のあり方～」をテーマに据えて、全教育活動の中で研究を進めている。

「花、福祉、歌声」の三分野の活動の中で、子ども達の「思いやりや優しい心」の醸成と、「表現力や伝え合う力」の育成により、児童一人一人の自己実現を期待し、かつ確信をしている。

花に心を寄せ、歌に心を合わせ、ボランティア活動に心を通わすなかで……。

（海野　良潤）

教育会だより

7・29～8・9　各種同好会の夏期講習会開催
8・5　教育会講演会（於　須坂市公民館）
○講師　前県教育委員長　宮崎和順先生
○演題「長野県教育の現状と課題」
9・3　第3回研究小委員会
9・7　第4回同好会
9・11　第5回代議員会
9・17　第4回理事会
10・1　第4回研究小委員会
10・5　上高井教育研究会（於　相森中学校）
10・9　第5回理事会
10・17　上高井教育会会報　第195号発行

日々

イギリスの教育事情

飯島　良子

一、教育は政府の最重要課題

サッチャーに代わって政権に就いたブレア首相は、教育を政策の最重要課題とした。なぜ教育なのか。それは二十一世紀のイギリスが挑戦する国家の課題に応え得るのは教育であり、国家繁栄の源は教育にあるとするブレア哲学からで「十八世紀は土地が富の源泉であり、十九～二十世紀には資本と工場が源泉で、そして今日は人こそが富の源泉である」と述べている。

かつて、イギリスの教育政策はかなり柔軟なものであった。学校は地方教育委員会の監督下にあったものの、カリキュラム・時間割・教育方法の決定は各学校に任されていた。しかし、ナショナルカリキュラム（全国共通カリキュラム）が創設され一九八九年九月からすべての公立学校で実施されている。新しい教育課程が長期的にどのような影響を及ぼすかは、現時点で判断するのは時期尚早ではあるが、旧教育制度での基礎教育を受けた子ども達が、簡単な単語さえも正しく綴れず、計算も間違いが多く苦手であることから、基礎学力向上のための大規模なとり組みが必要であったことは確かである。

二、統一テストの功罪

イギリスの義務教育期間は五歳から十六歳と定められている。義務教育においては「能力達成目標」と呼ばれる学習指導要領に基づいて教科ごと十段階で評価される。そして七歳、十一歳、十四歳、十六歳にそれぞれ統一テスト（GCSE）が実施される。中でも十六歳時のテストの結果は公開されるというのだ。学齢期の子どもを抱えている場合、学校選びの基準になるから大変である。

しかし、ここに大きな問題がある。まず統一テストを受ける段階からすでに学校の格差があるというのだ。今までの長い歴史の中で抜群の成績のいい子がたくさん集まっている学校があるし、一方貧困者や、移民の子ども達が多い地区だってあるのだ。

イギリスの町をみたとき髪や肌の色のいろいろな人達が多いなと思った。実際古代ノルマン人、ケルト人、サクソン人、北欧人が十一世紀までにイギリスに定住した上に、今はインドやアフリカの各国からもたくさんの移民が住んでいるという。ある学校では使われている言葉が二十五から四十ヶ国語になると聞いて大変驚いた。

学校の点数が上がることは教育がレベルアップしたとみなされる。又地域のレベルアップとも判断されるので指導する先生達は大変である。成績を上げるためには何をやってもよい、という事になってしまう。一日に必ず算数と国語の授業が入るようになり、いわゆる芸術部門が軽視される傾向になっている。その部分を補うためにサマースクールが夏休みに開かれている様にも思えた。（写真）

ブレア政権の施策は基礎的な力が子どもに付いてきたという良い面もあるが、知識偏重の弊害も出始めている、と説明して下さったエレーナ・ライト先生は心配されていた。せっかく一九六〇年以来、自己開発・個性の開発に力を入れてきて良い方向が見えてきたのに、今後問題がでてくるのではないか。又先生方への心理的な圧力も大きく辞めていく先生が多い、と嘆いている姿が心に残る。

（小山小）

くらしにつながる教育課程

藤澤　隆之

五月末に行われた堀川小学校の第七十三回の教育実践研究発表会に参加してきました。

堀川小学校は「個が育つ教育経営」を主標に長年実践を積み重ねてきた学校です。そこでは総合的な学習をどのように進めているのか興味を持ちました。

朝、学校に着くと、既に子どもたちが「朝活動」に取り組んでいました。自分できれいにしたいところを見つけ黙々と掃除をしていました。

次に「くらしのたしかめ」が各教室で行われました。六年生の教室では昨日の放課後の遊びの様子が話題となっていました。表情豊かに話す子、それにしっかりと耳を傾ける子ども。自分のくらしを確かなものにするために、仲間の考え方や立場を受けとめたり、様々な情報交換から問題意識を高める場として、授業にも関係してくる大事な時間となっているそうです。

授業では三年生の「お店ではたらく人」（社会科・総合）を参観しました。堀川小では教科から発展する総合的な学習が多いようです。本時では「このままでは商店街が危ないのではないか」という雰囲気の中、自分たちがこだわりを持って調べてきたお店のことを発表する場面でしたが、ここでもお店の人の頑張りをみんなに伝えようとする子、それをしっかり聞き、新たに自分の調べたいことにつなげていく子どもたちという姿が見られました。（全六十時間の十八時）

こうして一日の子どもたちの姿を見てくると、聞くこと・話すこと・行動することが関連づけられて高まってきていること、さらにそれがくらしに影響を与え、生かされていることを感じました。

研究会では総合のとらえ方や評価について意見が出されました。堀川小の先生は、総合は自分作りの学習であり、追究の中でどのような自分作りをしていったかを評価していきたいと語っていました。評価の範囲を子どもたちのくらしにまで広げていること、子どもたちの個性も考慮して評価してること、自己への気づきを促す評価を大切にしているとも話していました。

その他にも、板書、掲示物、連絡さえすればいつでも参観のできる開かれた学校体制など、大いに刺激を受けた視察となりました。

（日滝小）

日本体育・スポーツ経営学会に参加して

橋本　覚

夏休みの一日、東京に出かけました。目的は、「日本体育・スポーツ経営学会」に参加するためです。

私は教員になって十八年目を向かえていますが、なかなかしっかりした勉強をしないまま過ごしているなと反省している毎日です。それでも、「北信学校体育研究会」に所属し、研究授業もさせていただきながら、多少勉強してきました。そんな折、県外視察の機会を与えていただきましたので、体育の勉強を深めようと思い、この会に参加することに決めました。

この会は四名の先生の講義が中心でしたが、その中でも、筑波大学の八代勉先生には北信体育の研究授業等でもお世話になっていましたので、大変興味がありました。講座は四つでした。

一、新しい世紀を創る体育経営
　―体育が変われば学校が変わる―
二、学校体育に経営的視点を取り入れよう。
　―学校を変えるために―
三、学校体育は「年間九十時間」に耐えられるか？
　―学校週五日制下のカリキュラム・マネジメント再考―
四、学校週五日制時代の運動部活動
　―近未来の姿をイメージする―

「体育の授業が学校を変える。」そんな大きなテーマでしたが、「体育の先生が体育の授業をちゃんとしているのでしょうか？」という私たちの日々の実践に関わる耳の痛い話でした。子どもたちはそれぞれの運動種目で、何をどのように学んでいるのか。私たち体育教師は、何をどのように学ばせているのか。体育の授業に学びの姿があるのか。

確かに子どもたちは、嬉々として体育の授業に取り組んでいます。小学校ならなおさらです。私たちはそれに甘えている面がないのでしょうか。活動しているからといって学びの姿があると言えるのか。講師の先生方の話から、日々の体育の授業を振り返ることができた一日でした。

私は今、六年生の体育の授業を持っています。一時間一時間の授業は、六年間のカリキュラムの中の一時間であることを重く受け止め、一時間の主眼をはっきりさせ取り組んでいきたいと思います。そんな誓いを新たにしてくれた県外視察でした。

（高甫小）

研鑽

指導の評価と一体化

北村　雅

評価は本来、生徒の学びの改善を目的に行われなくてはならない。それは、現在の自分の学びの状況を正確に把握し、明日への課題と希望を明らかにすることである。言い換えれば、生徒が自らの学びを自省し、自信を促すことに他ならない。平成十二年十二月の教育課程審議会の答申「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価のあり方について」でも目標準拠評価を重視するとともに、生徒の優れた点や可能性、進歩の状況等を評価する個人内評価の充実が求められている。

七月三十一日～八月二日までの三日間、県外視察ということで「指導と評価　大学講座」に参加させていただいた。その中から学ばせていただいたことを記して、報告とさせていただきます。

学力論争を発端として、基礎的・基本的な内容の確かな定着が大きく叫ばれているが、根本的な問題は他にある。

①浅い学習が思考力・知識の構造化を阻んでいる。

ＯＥＣＤによる読解力の国際比較によると日本は第八位であり、事実を総合化し判断する力（思考力）が低い。

②知識の使用（適用）経験の不足が、定着を阻んでいる。

既習の学習内容の定着率が悪い原因は、知識を身につける学習の仕方に問題があり反復だけでは確かな学力になり得ない。

③学習意欲・学習価値観の低下が自己学習を阻んでいる。

ＩＥＡが数学・理科に対する意識調査によると日本の中学生は数学や理科の成績が国際的に高い水準にあるにもかかわらず、「好き」「楽しい」「生活の中で役立つ」「将来、数学や科学を使う仕事がしたい」と答えた生徒の割合は低く、意識は好意的・肯定的ではない。

以上のことから「学力低下」ではなく「学力の質の低下」が問題である。つまり、基礎的・基本的な内容を身につけさせる授業の質が問題とされていると思われる。「指導と評価の一体化」と言われるが、一時間の授業の質をいかに高めるか、目標に到達しない生徒への指導・支援をいかに行うかを「課題把握」「追究」「一般化」の各段階で具体化させることの大切さを学ばせていただいた。もう一度、授業の原点へ戻ることが大切だと再認識した三日間であった。

（東　中）

「努　力」

平林　徹

朝、Ｙくんが「先生、亀の甲羅にこけが生えたよ」と語りかけてきました。Ｙくんは二学期になって、日記に亀のことを毎日書いてきます。そんなＹくんに、どんなお返事を書けばよいかと考える毎日です。

今年の四月から旭ヶ丘小にお世話になり、毎日が勉強の連続です。先輩の先生方に授業を見ていただき、「まだまだ不勉強だな」と痛感することばかりです。

国語の授業で、「言葉」についてそれぞれ課題を決め、調べ、まとめる授業がありました。Ｙくんは「四十七都道府県の方言を調べたい」と、自分の心に残った方言を調べました。「よくここまでできたね」と私が褒めると、「ようし、休みの日もやるぞ」と言いました。「大変じゃない？」と聞くと、「大変だけど、面白いから」と言うのです。

Ｙ君の夏休みの研究は「クワガタの研究」でした。どんな木にいるのか、冬越しをするためにはどんなことに注三をしなくてはいけないか等、三年という長い時間をかけて完成した研究でした。学級で発表をしたとき、全員がその研究に集中して聞いています。終わったときには拍手が大きく響きました。発表した後のＹくんの顔は実にいい顔をしていました。Ｙくんの顔から、みんなに努力を認めてもらえた喜びが伝わってきました。

Ｙ君のように他の子どもたちもそうは上手くいきません。総合的な学習の時間では、旭ヶ丘町について調べてみようと計画しました。しかし、活動は成立しても、その子にどんな力がついたのかがわからず「活動あって学びなし」になってしまうのです。「つける力を明確にした総合的な学習」が私の課題の一つです。

運動会の組体操「サボテンができない」「ピラミッドができない」と訴えてきた子どもたちと一緒に放課後練習をしました。「必死にやっているのに」と涙する子もいました。当日、全部のピラミッドが完成し、それを崩したとき、みんなの顔が輝いていました。笑顔でした。私は何か震えるものがありました。子どもの作文には「友だちに『やったね』と言われ、嬉しかった」と書いてありました。これからも、「やり遂げた喜び」が、子ども一人ひとりの中に育つように努力をしていきたいと思います。

（旭ケ丘小）

本校の宝㊴
「率性学校玄関」栗ガ丘小学校

現在は、栗ガ丘小学校のＰＴＡ会館の玄関となっていますが、最初、この玄関は明治十六年八月七日に完成した率性学校の新校舎の玄関でありました。その後、校舎の増改築の度に移転され、昭和四十五年三月十三日、旧第一校舎家庭科室を移転改修保存し、かつ独立集会場としてＰＴＡ会館をつくったとき、玄関とし四回目の移築をしたのであります。

本校の歴史は古く、明治時代まで遡ることができます。

明治五年の学制発布に先立つこと半年、同二月に上高井では最も早い時期に郷学校が開設されました。

明治七年二月に、今まであった郷学校を廃止し、六川陣屋に「邇言学校」を、龍雲寺に「率性学校」の二校が開設されました。

率性学校の語源は中国の「中庸」の

「天の命　これを性と謂う。
性に率う　これを道と謂う。
道を脩める　これを教えと謂う。」

に基づくものであります。

以後、小布施村・都住村組合立小布施小学校時代を経て、明治二十五年、小布施尋常小学校、都住尋常小学校となっていきます。

戦後、小布施小学校、都住小学校が昭和四十五年統合され現在の栗ガ丘小学校となったのであります。

本校は昨年度で、都住小学校と小布施小学校が完全統合され三十周年を迎えることとなりました。今年度は学校入り口の外構工事も完成し、三十周年記念祭り、記念式典等の記念事業が計画されています。

今、この玄関は、学校敷地の片隅にＰＴＡ会館入り口としてひっそりとたたずんでいますが、明治、大正、昭和、そして平成と四つの時代にまたがって本校の教育を見つめてきた大切な玄関であります。

柱の繊細な彫りや、透かしを入れた飾り模様は、当時としては大変モダンな美しさを持っていたのではないかと思われます。

この玄関の前に立ちますと、明治時代から多くの子弟を世に送り出してきた小布施町の人々の教育にかける熱意を感じ取ることができます。

（山岸　深志）

火ばち談義

2回目の運動会

古賀真紀子

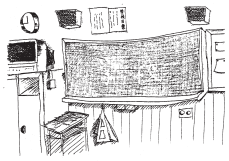
九月二十一日。この日は、昨年初任で須坂小学校に赴任してきた私にとって二回目の運動会でした。昨年は自分のクラスをみているだけで精一杯だった私が、体育係だったということもあり、今年はいくつかの主任をいただきました。その中で一番気掛かりだったのが全校体操(ラジオ体操第一)です。

運動会の特別時間割が始まった初日、早速出番がやってきました。自分のクラスでさえままならない私が、全校の前に一人で立つというのは、すごく気が重くもあるのですが、意外に気楽に壇上に立った私はその後、後悔でいっぱいでした。体操は左右逆にやる、言いたいことは伝えられない。でも一番は、今日の練習は子どもたちにとって意味があったのかと思うと、力不足を相当に感じました。気を落としましたが、まずは自分が自信をもって動けること、体操についてよく知ることが必要だと感じました。

そこで、テレビ体操を録画し、ラジオを録音し、何時でも体操ができるようにしました。音楽の条件反射で動けるようになったとき、体のかたさとジャンプのタイミングが合わないのに気付きました。床の上の練習ではできるつもりでも、壇上では体は後ろに反らないし、ジャンプの回数が揃いません。緊張のせいもあるのかもしれませんが、結局これは克服できませんでした。

しかし今回、前向きに取り組めたのは、全校練習の時に鏡になって動いてくださった先生、放課後教室でポイントを教えてくださった先生、全校の前に立つたびに励ましの言葉をかけてくださった先生や、明るく見守ってくれたクラスの子どもたちの支えが大きかったと感じています。来年、私はどのような形で運動会に参加しているか分かりませんがもっといろいろできるようになって、周りの先生方や子どもたちにかえしていきたいです。今回、思いきって全校の前に立たせていただいたことで普段の自分に足りない力やいろいろな大切なものに気付けました。少し薄れ掛けていた初心に戻ることができたように思います。どんなこともみんな勉強になります。

(須坂小)



常盤中　北村由美子

壁を超えた時

新井　孝之

平成十四年一月二十七日に相森中学校男子バレーボール部は長野県中学校選抜優勝大会で十一年ぶりに優勝した。

自分自身はバレーボールを指導しはじめて十年目の優勝であった。前任校からバレーボールの指導を始めたが、三年目で県大会に初めて出場でき、更に上の大会に生徒を連れて行ってあげたいと思い、何度も県のベスト四に挑戦したが、その厚い壁に阻まれ続けてきた。マッチポイントを握りながら負けた試合もあった。一セット先取しながら、選手が痙攣して負けた試合もあった。何度も県大会で涙を流してきた。

夏と新人で十二回挑戦してもだめで、もう自分では無理なのではないだろうか？自分には県の上に立つ力がないのではないだろうか？と何度も思った。その時には、初任の年に先輩から聞いた『人間十年必死にやれば何か結果が出るものだ』という言葉を思い出し、また新しいチームで生徒と一緒に挑戦してきた。

十三回目の挑戦。予選リーグは順調に勝ち上がり、ベスト四をかけた準々決勝。中信一位の三郷中と対戦したが、一セット目は常に五点から七点位リードされる展開で苦しい試合になった。五点をリードされ相手に先に二十点を取られ、『また勝てないのか』と一瞬思ったが、試合に専念しジュースの末に逆転。二セット目は楽に取った。準決勝も一セットを先に取られての逆転。決勝もフルセットで七点差でのチェンジコート。相森の粘りもここまでかと思った。しかし、選手は全然あきらめていなかった。二十点以降に追いつき、見事に逆転優勝。正直言って、生徒に勝たせてもらった優勝だった。同じ上高井の小布施と決勝ができたこともうれしかった。

県優勝チームとしての、夏までの道のりは長かった。プレッシャーとの戦いだった。選手はきっと自分以上に感じていただろう。負けられないという思いから、夏の大会でも苦戦が続いた。四人しかいない三年生の踏ん張りで、夏は県で準優勝。北信越大会に進むことができた。

バトンタッチされた新チームは、本気で先輩を超えたいと思い日々練習に励んでいる。さらに厳しい指導をしていきたい。技術を教えて勝つのではなく、人間を育てて勝つことを胸の中に深く刻んで。

(相森中)

自由な思考で

渋谷　茂夫

何を書いても良いのだそうだから最近、気をつけて生活している事について書こうと思う。それは物を「速く読む」ということだ。

最近、私は物忘れがひどく、教室から職員室まで来ておいて、「さて何しに来たのか？」ということが頻繁で、将来のボケか脳軟化が心配になってきた。

本屋で見つけた単行本に、「速読みのしかたで脳が鋭くなる」(青春出版社)というのがあった。今さら、にぶい脳が成長するはずはないが、脳軟化は避けたいものだと思っている。そこで、新聞を読むにしても、職員室の回覧を読むにしても猛スピードで読もうと意識している。

本によると、一分間に一、五〇〇文字が読めるようになるそうだ。仰せつかった火鉢談議の原稿は、九一〇字ほどだから、これくらいなら四十秒くらいだろうか。

しかし、これはどう考えてもとても無理な数字に思える。そんな速さで読もうとすると、何が書いてあるのか全くわからなくなって仕事上困ってしまう。

読むときには、文字のままで認識するようで、音声になおして認識していると時間がかかってダメだとういことだそうだが、それができたら苦労はしない。

小学校のころは、国語などで「声に出して読む」「気持ちを込めて読む」など、話の状況や作者の心情を捉えながら、どう読んだらよいか工夫して読むということを一般的に教えている。誰も速く読むなどということは教えられないで大人になったはずだから、文字だけで意味を認識するなどということは誰にも難しいことではないかと思う。

考えて見ると、一冊の本を三時間かけて読むより、一時間で三回、または似たような本を三冊読む方が効率が良いに決まっている。

誰にも教えられていない事でも、いつか気づいても良さそうなことが世の中には幾つもあるのかもしれない。学校では、あれもこれも教えなければならないことが年々増えていくような気もしている。そんな中で、それが正しいと思っていることや常識のように思っていることでも、いつか考えを破ってみるような創造性が自分には無かったのだと思う。創造力のある子を育てたいと思う。

(小山小)

編集後記

山々も色づきはじめ、収穫の時を迎える今日此の頃。各校の研究も充実期に入っていることと推察致します。

本号では研修に関する内容を中心に編集させていただきました。

お忙しい中、原稿をお寄せいただいた先生方に、心から感謝申し上げます。

(清水・瀧澤)